

# 第二十八回 「壺の碑」全国俳句大会（兼題の部）入選句

## 西山 睦先生 選

特選第一席	一三〇九	原爆忌少女のままの土踏まず	相原 光樹
特選第二席	四七七	銀漢や流木語り出すを待つ	伊藤 昌子
特選第三席	六〇三	父の忌の麦秋の空匂ひ出す	土見敬志郎
秀 逸	二八三	踵から一万歩へと青田風	神野礼モン
〃	四一五	晩夏光礎石の瑕の水たまり	佐々木和子
〃	六四〇	ドリツプの最後のしづく小鳥来る	菅原 和子
〃	七〇二	母に似ることの嬉しき枇杷の花	桑原 淑子
〃	一二九四	唇の滴八月十五日	西山ゆりこ
入 選	三八七	広島忌軍手はづして黙禱す	小松 温美
〃	四五六	ひぐらしや泥にまみれし農衣ぬぐ	櫻井アエコ
〃	六一三	退院の妻と腕組む良夜かな	塚本 治彦
〃	六八八	碑のうらは素面よ実むらさき	及川 源作
〃	六九三	初蝶や吾子が戻つて来たような	桑原 淑子
〃	七四六	兜虫からだのなかに夜がある	小田島 渚
〃	八一―	河は語部阿豆流為は早星	丹羽 裕子
〃	八九九	冬の午後つめのかけらのような月	今井 美鳥
〃	一一一七	原発の土より生きて蟬時雨	砂金 眠人
〃	一一三四	いにしへの大路こよひは虫集く	村上 修

成田一子先生 選

特選第一席	八一六	木の影を乱して秋の鯉となり	佐藤	みね
特選第二席	二七九	金平糖涼しき色に配らるる	服部	葉子
特選第三席	六九九	ひとり居の東京に炊く鰯大根	桑原	淑子
秀逸	二九四	八月や鷗鋼の声放つ	土屋	遊螢
〃	四四八	棄民みな漂砂となれり煙茸	大河原	真青
〃	九六〇	水澄みて呼吸するよう本を読む	小笠原	祐子
〃	九七四	終戦日河口に雲の溜りある	伊澤	二三子
〃	一一一六	銀河濃し水の一滴アフガンへ	砂金	眠人
入選	八三	さりげなく月見と答へ母さがす	持田	敏朗
〃	一八四	長鳴きの軍鶏万緑に放ちけり	坂上	清子
〃	四四三	フクイチは孤島となれりさみだるる	大河原	真青
〃	九九〇	秋風のリトマス試験紙は素肌	山本	峰子
〃	一〇一一	子籠りの子に豊水を送りたる	石井	萬壽夫
〃	一〇四四	夕方の家の匂いの熟れトマト	山野	井朝香
〃	一二〇七	朝靄の道にひとつの青胡桃	小野	道子
〃	一二六〇	枝豆やかつてこの家に十一人	熊谷	房子
〃	一三〇九	原爆忌少女のままの土踏まず	相原	光樹
〃	一三一三	葡萄剥き尽くして吾子の眠りけり	中島	走吟

## 高橋健文先生 選

特選第一席	一三〇九	原爆忌少女のままの土踏まず	相原 光樹
特選第二席	九六四	行き過ぎし風は還らず草の花	かくち正夫
特選第三席	四七七	銀漢や流木語り出すを待つ	伊藤 昌子
秀 逸	二九二	学校は光の母船梅雨の月	土屋 遊螢
〃	四四八	棄民みな漂砂となれり煙草	大河原真青
〃	四六〇	人生に放課後はなし稲の花	丸山千代子
〃	九〇三	「ノモンハンの夏」読み返す夏コロナの夏	伊澤 哲雄
〃	一二五六	石あれば仏と思う昼の虫	永野 シン
入 選	一二四	陸奥の闇引きずり歩く墓	齋藤 伸光
〃	二五四	月掬う掬つてもなお月掬う	菅野 三春
〃	二九九	戻るなと刻む津波碑草雲雀	岡本 幸治
〃	三〇四	くちなはになる寸前で動き出す	江原 遅筆
〃	三六二	これは落雑草という草はない	久田浩一郎
〃	四一一	みんなや踝くすぐる草ばかり	田村 慶子
〃	四七五	黒揚羽エンドロールの中を縫ふ	伊藤 昌子
〃	七四六	兜虫からだのなかに夜がある	小田島 渚
〃	九三四	雨男ならば誘はぬ蛍狩	中井由美子
〃	一〇四九	争乱の絶えざる星やいぼむしり	石山 善也

## 高野ムツ才先生 選

特選第一席	二八七	竈は火の記憶忘れず鳥渡る	兵藤 康行
特選第二席	四四八	棄民みな漂砂となれり煙茸	大河原真青
特選第三席	一〇九二	恐竜も歩みし大地ゑのこ草	林 静江
秀 逸	一一三	人間は人間なんだとろろ汁	福岡 悟
〃	三一四	やまびこの吐息にまたも薄紅葉	佐藤 みね
〃	四二六	歩むたびきちきちの翔つ水平線	中嶋 三雄
〃	五九九	はんざきの寢息か水のさざなみす	土見敬志郎
〃	六四七	月光を弾く翅あり蚊喰鳥	石の森市朗
入 選	五一	粽結ふ防災無線聞きながら	今井 文雄
〃	六六	ラムネ泡空の青からいただいた	夏みかん
〃	一二二	ぬめぬめと空気伸ばしてなめくじり	岡 まゆみ
〃	二四四	立ち漕ぎの自転車の尻夏旺ん	土屋 遊螢
〃	二八九	海を見ている向日葵と並びけり	池田 紀子
〃	二九二	学校は光の母船梅雨の月	土屋 遊螢
〃	三一〇	巻雲やどんぐりの生む水輪あり	佐藤 みね
〃	九七四	終戦日河口に雲の溜りある	伊澤二三子
〃	一二五六	石あれば仏と思う昼の虫	永野 シン
〃	一二七六	アイヌとは人間のこと夏に入る	熊谷 山里